

澤田美喜とエリザベス・サンダース・ホーム

ーローカルとグローバルな軌跡を辿るー

【指導教員】 アレクサンダー・ギンナン 中尾 雅之 長柄 裕美
【学 生】 有村二千香 石井 萌絵 石賀 大輝 岩本 紗季 河西 佑葵
カン・ウミ 後藤 由衣 塩見 蓮 清水 朱莉 末永有美香
立間 千華 谷口 稜真 長濱 妥紀 濱江 亜美 村山 芽生
山岸万由奈

はじめに

第二次世界大戦の敗戦後、サンフランシスコ平和条約が締結されるまでの7年間（1945-1952年）、日本は連合軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）により占領されていた。この期間中に占領軍と日本人の間で多様な人間関係が結ばれ、占領兵と日本の女性の間で多くの子どもが生まれた。当時、「混血児」と呼ばれていた子どもは、戦後の困難な状況のなかで遺棄されるケース也多発した。1948年、この問題に対応するために神奈川県大磯町に児童養護施設、エリザベス・サンダース・ホームが設立された。創立者は、澤田美喜（1901-1980年）という人物であった。

昨年度（2019年度）の地域調査プロジェクトの学生は、「澤田美喜と占領期の子どもたち—エリザベス・サンダース・ホームと鷗鳴荘^{おうめいそう}—」というテーマで調査を行った。タイトルにある鷗鳴荘は、美喜とホームの子どもたちが毎年夏を過ごしていた鳥取県岩美町にある澤田家の別荘である。昨年度の学生は、美喜の生涯やエリザベス・サンダース・ホームの歴史と現在、ホームと鷗鳴荘の関係などについて明らかにした。そこで私たちは、昨年度の学生があまり触れなかったホーム出身者の卒業後の生活について調査を進めることにした。ホーム出身者には、日本で育った人もいれば、養子縁組などで海外に渡った人もいる。

あいにく今年度（2020年度）は、新型コロナウイルス感染症の流行により、人と人とが互いに距離をとって生活することを余儀なくされた。そのため、調査活動の範囲は大きく制限され、昨年度の学生のように県外での調査に赴くことはできなかった。このような状況のなか、私たちは日本語と英語の文献調査、映像資料の分析、県内の現地調査、県外関係者によるオンライン講義を通して日本、ブラジルとアメリカにおけるホーム出身者の卒業後の生活について調べた。

まず、澤田美喜とエリザベス・サンダース・ホームについて知識を深めるために、美喜の自伝『黒い肌と白い心—サンダース・ホームへの道』（1963年）を中心に多くの文献を読んだ。そして、ホーム出身者の卒業後の生活について知るために、テレビ東京のドキュメンタリー『トンネルの向こうはぼくらの楽園だった』（2009年）などの映像資料を参照した。

感染症が世界的に広がるなか、感染者数の少ない県内で慎重にフィールドワークを行った。具体的には、岩美町で地元ガイド油浅郁夫さんの案内のもと、鷗鳴荘と澤田家の墓所を視察した。また、油浅さんに別荘の過去と現在について聞き取りを行うこともできた。

その後、ゲスト講師によるオンライン講義を受講し、

県外や海外の関連情報を収集した。最初に、神奈川県大磯町で郷土ゆかりの人物について語り部の活動をする武井久江さんのお話を伺った。武井さんは、ホームの敷地内にある澤田美喜記念館でも勤務しているため、現地の観点から美喜やホームの過去と現在について知ることができた。

次に、エリザベス・サンダース・ホームから養子としてアメリカに渡った方の人生についてのノンフィクション『ヨシアキは戦争で生まれ戦争で死んだ』（2007年）を読んだ上で、著者の面高直子さんによるオンライン講義を受講した。講義の際、面高さんにはホーム出身者の養子先で取材した経験について詳しく話していただいた。

その他に、文献や映像資料を通してブラジルに渡ったホーム出身者の状況について調べた。さらに、本調査のテーマに関連する英語の新聞記事を翻訳し、海外と日本の情報を照らし合わせながら考察を深めた。結果として、文献、映像資料とオンライン会議の多い一年間となったが、澤田美喜とエリザベス・サンダース・ホームのローカルな面、グローバルな面の両方について学ぶことができた。以下において、その全容について報告する。

澤田美喜

私たちは、澤田美喜について知るために、まずは彼女の自伝『黒い肌と白い心—サンダース・ホームへの道』（1963年）を参照した。美喜は1901年9月19日、三菱財閥の創始者岩崎弥太郎の孫娘として東京市本郷区（現在の東京都文京区）で生まれた。美喜は幼いころ麻疹にかかった際、元赤十字の看護師が読んでいた聖書を耳にし、キリスト教にひかれるようになった。しかし、岩崎家（特に美喜の祖母）は厳格な真言宗信者であったため、キリスト教を拒んでいた。美喜は祖母に隠れて何度も聖書の「密輸入」を試みたが、それは毎回取り上げられる結果となった。東京女子高等師範学校附属高等女学校の同級生から聖書を入手していたため、祖母に学校を退学までさせられた。退学後、美喜は一流の家庭教師に一日中しぼりつけられる日々を過ごすようになった。

1922年、鳥取県岩美町出身の外交官で、クリスチャンである澤田廉三（1888-1970年）との結婚をきっかけに美喜はキリスト教に改宗する。外交官夫人として夢見た海外生活を送るようになり、アルゼンチン滞在中の1923年に長男信一が誕生し、帰国後の1924年に次男久雄、北京滞在中の1925年には三男の晃が生まれた。その後、日本で1928年に長女恵美子が誕生し、美喜は4児の母となった。

美喜の海外経験は、エリザベス・サンダース・ホームの活動に大きく影響している。例えば、1931年に訪れた

イギリスの孤児院ドクター・バーナードス・ホームは、美喜が設立する児童養護施設の原型になったと言える。孤児院に対して暗いイメージを抱いていた美喜は、ドクター・バーナードス・ホームの明るい雰囲気を見て驚愕したという。また、1932年にフランスで出会った歌手・女優ジョセフィン・ペーカー（1906-1975年）とは一生の友人になり、美喜はペーカーが経験した人種差別から自伝のタイトルの着想を得ている。

敗戦直後の7年間（1945-1952年）、日本は連合軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）により占領され、沖縄県を除く日本全土の連合国軍地上部隊を統括する米第8軍の司令部は、神奈川県横浜市に置かれていた。戦後の激しい混乱のなか、日本人は占領軍と共生することになった。多くの人々は占領軍の施設で雇用され、兵士と日本の女性の間で子どもが生まれる場合も少なくなかった。いわゆる「混血児」と呼ばれた子どもたちは、望まれない妊娠によって誕生することもあり、また貧困、食糧難、周囲からの差別を理由に遺棄されるケースも多発した。

美喜がこうした子どものために児童養護施設を設立することになった経緯として、特別な出来事があった。自伝によると、ある日、列車内で網棚から風呂敷包みが美喜の手元に落ちてきた。美喜がそれを網棚に戻そうとした際、近くの警察が包みを開けるように命じた。すると、なかに黒い肌の赤ん坊の遺体が入っていた。美喜が赤ん坊を遺棄したという嫌疑を晴らそうとすると、「…なぜ、日本国中の、こうした子供たちのために、その母になってやれないのか…」といった神の啓示を受けたという。これが、エリザベス・サンダース・ホームの設立を決定づけた瞬間であった。

GHQが行った財閥解体により岩崎家は土地や財産を没収され、苦境にさらされていた。そのなかで、美喜は1948年に懸命に調達した資金で神奈川県大磯町にある岩崎家別荘を買い戻し、エリザベス・サンダース・ホームを設立した。

新型コロナウイルス感染症の影響により、私たちは昨年度の学生のように神奈川県での現地調査を行うことはできなかった。その代わり、2020年10月30日に大磯町で郷土にゆかりある人物について語り部の活動をしている武井久江さんにオンライン講義を依頼し、美喜とホームについて詳しく教えていただいた。武井さんは、ホームの敷地内にある澤田美喜記念館でも勤務しており、施設の過去と現在の写真を多く紹介してくれた。彼女によるとホームでは3度も改装工事が行われており、当初、男女別に建てられた寄宿舎は現在男女混合となっている。また、ホームの敷地内にある礼拝堂や美喜が生活してい

た木造和風住宅「ママちゃまの部屋」も紹介していただき、バーチャルツアーに参加した気分になった。

その他に、エリザベス・サンダース・ホームという名の由来となったエリザベス・サンダース女史(1870-1946年)について教えていただいた。美喜が児童養護施設を運営し始めて5ヶ月目に、約40年の日本生活を続けたサンダース女史が貯金のすべて（170米ドル）を聖公会の日本事業に贈ると遺言し、それがホームへの初の寄付となった。したがって、美喜は最初の寄付者の名前に因んで施設をエリザベス・サンダース・ホームと名付けた。ここまでは、自伝にも書かれていたが、武井さんにはサンダース女史が三井家の養育係として働いていたことや、彼女のお墓は横浜市中区山手町の横浜外国人墓地にあることなど、本には含まれていない詳細を教えていただいた。1時間程度の講義の後、私たちは一人ひとり質問する機会をいただき、「美喜の人柄」「大磯町住民の美喜に対する認識」などについて確認しながら、調査を深めていった。

鳥取県岩美町の鷗鳴荘

自伝によると、美喜は1922年に廉三と結婚した後、澤田家の墓参りのために鳥取県浦富村（現在の岩美町）を訪れた。浦富は、白い砂と青い松の生えた、数多くの島々が点在する漁村であり、その美しさは美喜がこれまで見たことがないものであった。浦富に滞在中、美喜は緑の山に取り囲まれた入江を気に入り、その土地をすぐに買い求め、そこに小さな家を建てた。鳥取県立公文書館が編集した『澤田廉三と美喜の時代』（2010年）には、長男の澤田信一が執筆した浦富についての記事が含まれている。それによると、浦富の入江は「熊井の浜」（熊井浜）と呼ばれており、1937年の夏に建てられた小さな家は澤田家の別荘「鷗鳴荘」となった。鷗鳴荘は、戦時に美喜たちの疎開先となり、戦後はホームの子どもたちの臨海学校となった。

私たちは2020年8月1日と10月25日の二度にわたり、岩美町でのフィールドワークを行った。そこでは、鷗鳴荘に加えて澤田家の墓所を訪問し、調査の際にはいわみガイドクラブの油浅郁夫さんに案内していただいた。油浅さんは岩美町で生まれ育ち、早期退職してから地元のガイドとして活動すると同時に鷗鳴荘の維持管理を行っている。鷗鳴荘を維持するために長年にわたって自らが様々な修理を施されてきた。

私たちは、岩美町に到着後、まず鷗鳴荘を視察した。鷗鳴荘は国道沿いの険しい山道を下った熊井浜に位置している。木造二階建ての別荘の前に砂浜が広がり、日本海を一望することができる。1階には居間があり、その

奥に美喜の寝室がある。そして、広い畳部屋のある2階へは、螺旋階段でつながっている。私たちは、鷗鳴荘の内外を見学するとともに、油浅さんにホームの子どもたちの鷗鳴荘での過ごし方についてお話を伺った。

鷗鳴荘がホームの臨海学校だった当時、毎年夏に約70人から100人ほどの子どもと職員が訪れていた。子どもたちは、弁当を持って浦富海岸の名所である菜種島や近くの洞窟、さらに足を延ばして鳥取砂丘など様々な場所へ遠足に行った。また、熊井浜では専門家が子どもたちに周辺の自然環境について授業を行うこともあった。このような鷗鳴荘での経験は、子どもたちにとってかけがえのない思い出となった。油浅さんによると現在の鷗鳴荘は、再建された2代目の別荘である。時期は定かではないが、本来の建物は火事によって全焼してしまったという。

鷗鳴荘の視察の後、私たちは澤田家の墓所に訪れた。墓所の入り口には、「初代国連大使 澤田廉三 サンダース・ホーム創設者 澤田美喜 墓所入口」と彫られた石碑がある。これは、油浅さんがホームの関係者に相談した上、自ら費用を負担して建てられたものだ。奥に進むと廉三と美喜、長男の信一、三男の晃の眠るお墓がある。

このフィールドワークを通して、私たちは、鷗鳴荘に関して文献に記されていない情報を得ることができた。油浅さんは、澤田美喜とエリザベス・サンダース・ホームについての歴史の伝承と鷗鳴荘および澤田家の墓所の維持管理をほとんど一人で行っている。油浅さんの積極的な活動のおかげで私たちも澤田家の別荘とお墓を訪問することができ、ホームと岩美町の関係について学ぶことができた。

ホームでの生活

神奈川県大磯町のエリザベス・サンダース・ホームは、1948年、岩崎家の別荘であった土地に設立された。ホームでの生活については、断片的な情報しか見つからなかったが、子どもたちはそこで教育、信仰、そして遊びの時間も過ごしていたことが分かる。差別が原因で一般の学校に入学することのできなかった子どもたちのために、美喜は1953年4月、ホームの敷地内に聖ステパノ学園小学校を開校し、自ら初代校長を務めた。「ステパノ」という名は、1945年に戦死した美喜の三男晃の洗礼名に因む。ホームの子どもたちの成長に合わせて、6年後の1959年4月に中学校も開校した。

また、ホームの敷地内にチャペルがあり、子どもたちは毎日そこで礼拝をしていた。その他に、美喜の自伝にはホームでの日常生活の写真が多く掲載されており、彼

女の芸術と文化に対する関心の影響で、子どもたちは絵画、演劇、舞踊などを学んで楽しんでいたことが分かる。さらに、早い段階からホームの野球チーム「ステパノ野球団」が結成されていた。社会から隔離されて暮らしていた子どもたちであったが、ホームの中では多様で充実した活動に取り組んでいたようである。

前述の鳥取県岩美町での夏とは別に、ホームの子どもたちは定期的に国内で旅行する機会もあった。美喜の自伝によると、子どもたちは春の修学旅行で奈良県天理市を訪れ、秋には農繁期の実習も兼ねて岩手県の小岩井農場で働いていた。奈良県へは、一度に15人から20人が行き、天理市の古跡や寺院を見学した。小岩井農場は、美喜が幼いころに両親と過ごした場所である。そこで、ホームの子どもたちは、畑の雑草取りやリンゴ畑での仕事をしていた。この二カ所では差別の目にさらされることはなく、子どもたちは何の屈託もなく過ごせたという。

卒業後の日本での生活

卒業後、日本で生活が続けたホーム出身者は就職したり結婚したり、多様な道を歩みながら全国に散らばった。ホーム出身者の卒業後の生活について調べるために、還暦を迎えている1期生や2期生の人生に焦点を当てたテレビ東京のドキュメンタリー『トンネルの向こうは僕らの楽園だった』（2009年）を参照した。100分程度の番組のなかで、複数のホーム出身者の日本での生活について詳細に取り上げられていた。

その一人は、1期生の谷口譲司である。彼は4歳の時、長崎から兄弟3人でホームに預けられた。美喜の助言にしたがって、ホームで暮らしている時にトラックの運転免許証を取得した。そしてホーム卒業後、栃木県でお菓子を運搬する運転手になった。自分の家庭を築きたいと望んでいた譲司は、ひとめぼれした同僚の恵子と婚約した。そのことを美喜に報告すると、ホームのチャペルでの結婚式の日程がすぐに決まった。結婚資金を貯めるために、譲司は長距離ドライバーとして仕事をしていて、ある日、運転中の一瞬の居眠りで死傷事故を起こしてしまった。この事故により助手席にいた同僚を含む4人が死亡し、譲司は交通刑務所に入ることになった。美喜はすぐに刑務所に駆け付けたが、戸籍上の親族でないため、面会することはできなかった。美喜は譲司を励ますために手紙を書き、結婚については、譲司の刑にかかわらず、「腕の中に飛び込んで来てくれる人だったら、結婚すべき」という助言を与えた。出所後、譲司は1年間待ってくれた恵子と結婚した。現在は、クレーン・オペレーターとして仕事しており、休みの日には近所に暮らす子どもと3人の孫が遊びに来ている。

もう一人、番組で詳しく取り上げられたのは、2歳の時に大阪からホームに預けられた1期生の稲葉年正である。卒業後は、山梨県南部町のゴルフ場で料理人として働いている。24歳の時に結婚し、今は子どもと孫にも恵まれている。テレビ東京の番組が制作される数年前に、年正の出生にまつわる記述を含む一冊のノートが見つかり、そこには彼の両親の写真も貼ってあった。

年正は子どもの時、自分の生みの親について深く考えなかったという。だが、ノートの発見を機に自分の出自を探るため、大阪にある母親の実家に訪れることにした。母親の実家では、60年ぶりに叔母の見市貞子と再会し、話を聞くと、母親の谷本芳江は大阪でタイピストとして働いていたことが分かった。占領軍兵士との間に子をなしたが、年正が1歳の時に結核で死亡してしまった。それ以降、代わりに叔母の貞子が面倒を見ていた。しかし、戦後の貧困により年正に十分な食事をとらせることができず、ホームに預けることを決心した。

その他に、3期生の山田譲司についての紹介もあった。譲司は2歳の時にホームに預けられた。現在は、不況のため複数のアルバイトを掛け持ちしているが、彼の一番の職業は、ベース奏者である。譲司いわく、音楽は人種、宗教、言語などを問わないため、ベースを30年も続けることができた。彼の夢は、将来、演奏ができる自分の店を持つことである。

さらに、番組はカップルとして暮らす同級生の土山佳晴とイシュリの人生について取り上げていた。佳晴は、20歳頃からトラックの運転手として働いている。15歳の時に、東京巨人軍の練習生として入団したが、ハードが高すぎた。それ以来、トラックの運転手として全国を駆け回っている。

一方、インド系の父と日本人の母の間で生まれたイシュリは7歳の時に中国からホームにやってきた。番組に登場するホーム出身者のほとんどは、子どもの時から美喜に懐いていたと語る。しかし、イシュリは美喜になかなか心を開くことができず、ホームを卒業してすぐに結婚した。美喜に頼らずに自分で家庭をつくりたかったという。その後、2人の子どもを育てるうちに、美喜への敬意と感謝の気持ちを抱くようになった。50代になって、子どもの独立を機にイシュリは離婚した。それから、ホームの同窓会で再会した佳晴と暮らしている。

一部のホーム出身者は、現在も同窓会を行っている。お互いの近況を語り合ったり、昔話に花を咲かせたり、同級生の死を悼んだり、思い思いの時間を過ごす。このようなイベントは大磯町のホームだけでなく、岩美町の鷗鳴荘でも行われる場合がある。

海外に渡った子どもたち

以上のように、卒業後、日本で生活を続けたホーム出身者とは別に、多様な理由で海外に移住した人もいる。数の限られた例であるが、私たちはブラジルとアメリカに渡ったホームの子どもたちについて調べることができた。

ブラジルに移住したホーム出身者については、美喜の自伝の他に、鳥取県中南米移住史編集委員会が編集した『鳥取県中南米移住史』（2008）および先述のテレビ東京ドキュメンタリー『トンネルの向こうは僕らの楽園だった』（2009）を参照した。『鳥取県中南米移住史』によると、サンパウロ州カンピーナス市に岩崎家の東山農場があり、美喜の義兄節蔵は過去にブラジル大使を務めていた。このような接点を機に、美喜は日本と比べて人種差別が少ないブラジルであればホームの子どもたちは幸福に暮らせると考えた。自伝によると、美喜は1954年にホームの子どもたちが切り開ける土地を探し求め、ブラジルにおける24か所の日本人入植地を視察した。その後、1963年に東山農場の株を売却し、アマゾンの土地を購入した。アマゾンへの移住の準備としてホーム内にアマゾン教室を開設し、卒業する前に開拓者の教育と農業実習を受けさせた。1965年の第一陣では、6人がブラジルへ渡った。

ドキュメンタリーで紹介された3期生の赤澤譲次もブラジルに移住したホーム出身者の1人である。譲次は、1948年に生まれ、1歳半の時にホームに預けられた。1966年、18歳の時に開拓者としての希望を持ち、ブラジルへ渡った。しかし、現地では美喜の思ったようには歓迎されず、差別や批判もあったという。譲次はこの悔しさをばねに一旗上げるように努力し、20代には大農場主に成長した。パラ州ノバチンボテアの農場で胡椒を栽培するようになり、1973年には現地の日系人と結婚し、2人の息子に恵まれた。熱心に活動を続ける譲次であったが、やがて肝臓がんを患った。ドキュメンタリーでは、譲次のブラジルでの闘病生活が取り上げられ、ホームで一緒に育った仲間からのお見舞いのビデオメッセージを見ながら幼少期の思い出を懐かしむ譲次の姿が映し出された。番組中に、譲次は家族や遠く離れた日本にいるホームの仲間たちに見守られながらブラジルで最期を迎えた。

次に、養子としてアメリカに渡ったデミアン・アカーン（Demian Akhan）の人生について取り上げる。この事例に関しては、アカーンが2009年、ルーツ探しのため来日した際に日本の英字新聞*The Japan Times*に掲載された記事を参照した。

デミアン・アカーンは、1949年にアメリカの兵士と日本の女性の間に生まれた。アカーンの母は、貧困や周囲

からの厳しい目により、彼を育てることができなくなり、溺死させようとした。それを発見した軍警察によって、アカーンはエリザベス・サンダース・ホームに預けられた。生後6カ月で日本在住のアメリカ人軍曹の家庭に受け入れられ、その後アメリカに渡った。

アカーンは10代の時からルーツ探しを始めていた。自身の祖先について調べるため、ホームに手紙を送ったが、美喜はアカーンの実母の新しい人生を守るために情報の提供を断ったという。その後、90年代半ばに職場の日本人同僚の助けにより、彼のルーツ探しは新たな展開を迎えた。

アカーンはアメリカの市民権を得る過程で、日本領事館から母方の出生記録を受け取っていた。それを同僚に翻訳してもらうことで、2歳年下の異父弟の存在が明らかになった。彼は弟に手紙を送り、半年後に届いた返信には母親が数カ月前に亡くなったと書かれていた。

アカーンは、その後も弟と手紙を交わし続けたが、彼にどう思われているかが分からず、日本を訪ねることをためらっていた。ようやく60歳になって来日した際、アカーンは大磯町のホームを訪問した。そこで、自分がホームにいた時の写真に写っている芝生を見つけて喜びを感じ、大磯の海の香りに帰郷した感覚を覚えたという。また、日本では異父弟との対面も果たした。

アカーンによると、養父の転勤のたびに繰り返された転校の影響で孤独な人生を送っていた。また、アメリカでの生活について次のように語っている。

I'm not accepted in American culture, I'm not accepted by blacks at all, and I'm not accepted by whites as being a black person. When I'm talking to some people, it's so boring I want to shoot myself! I've had such a different life, I've always been very isolated.

[アメリカ人として受け入れられていない、他の黒人には全く受け入れられていないし、肌が黒いせいで白人にも受け入れられていない。他の人と話しても、話が合わなくて死にたくなる。他とは違った人生を生きてきて、常に孤独だった。]

アメリカに渡った「ヨシアキ」

私たちは、養子としてアメリカに渡った子どものさらなる事例を調べるため、エリザベス・サンダース・ホーム出身の後田義明(スティーブ・ヨシアキ・フラハティ)の人生に焦点を当てたノンフィクション『ヨシアキは戦争で生まれ戦争で死んだ』(2007年)を読んだ。その後、著者である面高直子さんにオンライン講義を依頼し、本

を執筆するに当たって義明のアメリカの養子先の家族や実の母親を取材した経験について詳しく教えていただいた。また、講義の際に貴重な写真や資料もたくさん見せていただいた。

面高さんがこの本を執筆することになった背景には、夫の面高昌義さんの存在がある。テレビ番組制作の仕事をしていた昌義さんは、1978年にエリザベス・サンダース・ホームを取り上げたドキュメンタリー番組『子供たちは七つの海を越えたーサンダース・ホームの1600人』に関わったことを契機に義明の人生に魅了され、1995年に義明についての番組を制作した。しかし、その番組で昌義さんの思いが伝え切れなかったため、改めて物語を執筆し直していたが、2006年に急逝してしまった。面高直子さんは、夫の意志を引き継ぎ、書籍を完成させた。本書は、ホーム出身者の義明自身が執筆した文献ではないことを考慮しなければならないが、面高さんは義明の家族写真、手紙や養親と実母の証言をもとに本を執筆しており、私たちの調査テーマと一致する内容が詰まっている一冊である。

義明は1947年1月11日に生まれ、4歳の時にエリザベス・サンダース・ホームに預けられた。1958年11月、11歳の時にアメリカ・サウスカロライナ州コロンビアで暮らす25歳のロナルド(ロン)・フラハティとロンの母であるルイス・フラハティのもとへ養子に行った。きっかけとなったのは、1957年4月、ロンがアメリカ陸軍座間基地に勤務していた時、同僚の和田京子に連れられホームの子どもたちに野球を教え始めたことである。ロンは、子どもたちのことが好きになり、1958年10月、アメリカに戻る際、澤田美喜に養子が欲しいと申し出た。そして、美喜は義明を選んだ。

義明はホームで野球が特に上手だったわけではない。一般的に養子に出る子どもは幼少期に選ばれるが、義明は既に11歳になっていた。推測に過ぎないが、美喜が11歳になった義明を養子に出した理由のヒントとなる文章がステパノ学園に残っている。義明は小学生の時に、将来刑事になりたいという作文を書いている。美喜は、義明の夢はアメリカでなら叶えられると思っていたのかも知れない。美喜は、自身の三男児の洗礼名「ステパノ」(スティーブン)を義明に英語のミドルネームとして付けていることから、義明に対し特別な思いがあった可能性がある。

アメリカに到着した際、義明はフルネームを記載した養子縁組書をロンとルイスに見せ、その瞬間から「スティーブ」という名でアメリカでの生活を始めることとなった。

スティーブはまずロンの近所に住んでいるポーター

家と出会った。その前に訪問した隣人からは、差別的な理由で追い返されてしまったが、ポーター家の子どもダン(ダニー)はスティーブと同年で、すぐに親友となった。その後、ダニーと同じ公立バルベディア小学校へ入学した。スティーブは、全く英語が話せなかったため、一学年下の入学となった。1959年の春、ロンがコーチしていた地域の野球団に入りダニーとともに放課後は野球に勤しんだ。さらに1961年、ポニーリーグの選手として活躍し、地元の新聞にも名前が載った。この頃からスティーブは頭角を現していく。翌年1962年の夏、ロンの結婚をきっかけに家族4人で5キロ離れた地区に引っ越した。15歳となったスティーブは成長していて、性格も明るくおしゃべりも達者となっていた。そして地元の野球チームに入りコロンビア地区代表選手に選ばれた。高校に入ってから代表選手に選ばれ、チームを優勝に導いた。またフットボールでも大活躍した。3年生になると、地元のフットボールチームに所属し紙面で注目され続けた。スティーブは、将来有望なスポーツ選手としての道を歩み始めていた。

同時に1960年代にアメリカのベトナム戦争への軍事介入が拡大していた。この戦争がスティーブの人生を大きく左右することになった。当時スティーブにはシャーロット・ミドルトンという彼女がいた。学校一の美女とされるシャーロットと多くの写真を撮り充実した生活を送っていた。しかし、スティーブがシャーロットの肖像を胸に抱えているスナップ写真の裏に、「僕はもう、よそ者じゃない」(Well maybe it's not stranger after all)とスティーブが書いたメッセージがある。このメッセージから、表向きではアメリカの生活に上手く適応していたスティーブでも、裏では自身のアイデンティティに対して苦悩する片鱗があったことが窺える。そして、シャーロットとの交際を通して自らの結婚や家庭づくりの可能性が現実味を帯び、アメリカ社会への帰属性を感じていたと推測できる。高校を卒業する際、スティーブは野球の推薦でテネシー州にあるブライアンカレッジへの進学が決まっていたが、シャーロットと交際を続けるつもりであった。しかし、シャーロットの父親から差別的な理由で絶縁を強いられた。結局、「よそ者」の宿命から抜け出せなかった。

1966年6月22日、スティーブはアメリカ市民権を獲得した。だがそれは、ベトナム戦争に本格介入した当時のアメリカにおいて、兵役義務が生じることを意味していた。ダニーの入隊の意志を聞いたスティーブは、自身も軍隊に志願することにした。この時、スティーブはメジャーリーグのシンシナティ・レッズからスカウトを受けていた。ロンに相談すると、戦争に行ってはならない

と大きく反対されたが、それにもかかわらず、スティーブは入隊することを決意した。

スティーブが入隊を決めた理由には、アメリカ国民としての務めを果たすためだけでなく、軍の休暇を利用して日本で自分のルーツを探る真意もあったと思われる。具体的には、ダニーと一緒に大磯町のホームを訪問して、さらに、美喜から実の母親に関する話を聞くことも考えていたようである。

スティーブの母親は後田次恵という。占領期に香川県のダンスホールで働いていたが、ある日、アメリカ兵にレイプされ、スティーブを身ごもった。中絶手術を検討したが、費用が高すぎて間に合わなかった。スティーブの日本語名となった「義明」は、当時次恵が好きだった「輝義」という男性から一文字拝借した。懸命に生計を立てようとしたが、生活が苦しく疲弊し、スティーブに十分な栄養を取らせることもできなかった。さらに、スティーブが成長するにつれて外見が欧米人の特徴を表すようになり、次恵はやむを得ず、ホームに預けることにした。

1967年10月3日にアメリカ陸軍に入隊したスティーブは1年間の基礎訓練の後、軍曹として第101空挺師団の戦闘部隊に配属され、翌年10月25日にベトナムへ上陸した。当時の戦況は悪化・長期化していた。そして1969年3月25日、スティーブの分隊がアシャウ溪谷に出撃した帰り道に、休憩の際を狙ったスナイパーによりスティーブは頭に撃たれ、即死した。スティーブの訃報は、サウスカロライナ州の新聞で取り上げられ、葬儀には500人以上が参列し、ロン、ルイス、ダニーのみならず、多くの人々がスティーブの死を悲しんだのである。

一方、アメリカ軍人と結婚し、夫の仕事に合わせて海外を転々としていた次恵(結婚後は、ツギエ・ベイカー)は、スティーブの戦死から9年が経った1978年8月、23年ぶりに徳島県木頭村に帰郷していた。その時、偶然に面高昌義さんが制作に関わっていたホームの子どもたちを追ったドキュメンタリー番組『子供たちは七つの海を越えた』を目にする。ツギエはそこで初めて、自分の息子がアメリカに養子に出され、戦争で亡くなったことを知ったのだ。タイピストとして米軍基地で働き、アメリカ軍人と結婚したが、結局迎えに行くことができなかった自分の愚かさを悔やんだ。

その後、ツギエが美喜に送った手紙が、1984年、スティーブについて調査するためにホームを訪問していた昌義さんの目に留まる。何かの因縁を感じた昌義さんは、アメリカに住むツギエを訪ねた。そこから2人の交流が始まり、1995年4月、72歳になったツギエは昌義さんと一緒にサウスカロライナ州コロンビアへと足を運びロン

とルイスと対面した。そして、ダニーの案内でスティーブの墓へ参り、ツギエは44年越しにスティーブとの再会を叶えた。

以上の文献を読んで私たちは、海外に渡った養子の一例について詳しく知ることができた。日本で生まれ、11歳まで日本で暮らしていたスティーブは、養子としてアメリカに渡ってから英語を身に付け、名前も義明からスティーブに変わった。一方で、アメリカの市民権を獲得しても、日本で生まれた自分のルーツを決して忘れてはいなかった。

私たちは特にスティーブがベトナム・フエ省に到着した際の場面について着目した。スティーブは、約10年ぶりにアジアを訪れることとなり、日本の地方を思わせる田園風景や、顔立ちや体型において日本人とよく似たベトナム人を目の当たりにした。この状況は、彼が10年かけて慣れてきたサウスカロライナ州の白人社会とは大きく異なり、日本で生まれ育った自分を想起させる瞬間でもあったと思われる。

また、2020年11月27日、面高直子さんのオンライン講義の際には、大学生時代のスティーブが美喜に送った手紙の写しを見せていただいた。その手紙は、英語で書かれていたが、「Totoi」（原文ママ）という地名や鷗鳴荘を指す「summerhouse」などの表記が見られた。幼少期に夏を過ごした鳥取が、大学生になったスティーブの内面に記憶されていたことが分かると同時に、その思い出を懐かしむ様子も見えて取れる。これらのことから、名前は義明からスティーブに、言語は日本語から英語に変わり、アメリカ社会と文化の中で成長したスティーブであっても、日本で育った自分の側面を切り離すことのできない大切な一部分であると強く認識していたと考えられる。

面高さんの本にはスティーブに関する多くの写真が掲載されているが、オンライン講義の際は本に含まれていなかった写真や資料を紹介していただいた。特に印象に残ったのは、先述した「僕はもう、よそ者じゃない」（Well maybe it's not stranger after all）という、スティーブの写真の裏に書かれた自筆のメッセージである。これは、面高さんがサウスカロライナ州での取材の一環としてフラハティ家から借りた写真をスキャンしていた際、偶然発見したものであり、ノンフィクション物語を構成する上で重要な鍵となったという。

その他に、スティーブが通った学校、高校生の際に描いた絵画、彼が現在眠るお墓などの写真を見せながら、アメリカでの取材の経験と本の執筆過程について詳しく教えていただいた。そして、昌義さんが制作に関わっていた番組『子供たちは七つの海を越えた』（1978年）の

一部もを見せていただいた。私たちは、これまで澤田美喜に関連する文献や写真を何度も目にしていたが、番組では美喜が動いている姿を初めて見て、彼女の声を初めて聞いて、大きな衝撃を受けた。面高さんの講義の後、私たち一人ひとりが質問をする機会を得た。スティーブが入隊した理由についての意見やスティーブの死後のロンの気持ちの変化など様々なテーマを巡って議論を深めることができた。

「ヨシアキ」に関する最近の動き

面高さんの本は2007年に出版されたが、それ以降もスティーブ・フラハティに関する出来事が起きている。まず、2012年にスティーブの人生は、サウスカロライナ州で再び話題になった。私たちは、油浅さんにご紹介いただいたアメリカの新聞*Politico*および*The State*の記事を翻訳して、この状況について調べた。

スティーブの戦死から43年経った2012年、コロンビアのダウントウンにあるメモリアルパークで式典が行われた。スティーブの約20人の親戚や軍隊のメンバー、退役軍人、一般の人々まで参加したこの式典で、ベトナム戦争中に届くことがなかったスティーブの手紙4通が家族の元に返された。死ぬ寸前に書かれたものであると思われる4通の手紙には、戦争のリアリティや日々の考えなどの内容が綴られていた。弾丸が自分の側を通ったこと（“I felt bullets going past me”）や多くの死者を見送ったこと（“We took in lots of casualties and death”）など、生々しい体験が書かれており、戦場の厳しさが窺える。同時に、手紙を送ってくれる大切な人たちへの感謝を忘れず、彼らに大きな不安を抱かせないように心配りをしているところに、スティーブの優しい人柄が表れているように思われる。

これらの手紙は、スティーブの死後、ベトナムの兵士によって抜き取られ、半世紀近く保存されていた。ベトナムのグエン・ブー・ダット大佐がスティーブの手紙を受け取り、2011年8月、ネット上でそれについて言及した。また、POW/MIA（戦時捕虜/戦闘中行方不明）事務所で働いていた国防総省の元従業員であるロバート・デスタットがこのネット情報に気付き、スティーブの手紙を家族の元に返すべく尽力した。

最終的に、その手紙はベトナム人兵士の体から抜き取られた戦争日記と引き換えに国防長官のレオン・パネッタに引き渡された。このような戦争遺物の共同交換が行われたのは初めてであった。現在、スティーブの手紙は、サウスカロライナ州コロンビアにある軍事博物館（the S.C. Confederate Relic Room and Military Museum）で展示されている。

さらに、面高さんの本とスティーブを巡る話は、2020年8月13日、フジテレビで放送された番組『奇跡体験！アンビリバボー』の主題となった。私たちも調査の一環でこの番組を見た。内容は、ほとんど『ヨシアキは戦争で生まれ戦争で死んだ』を簡潔にまとめた形になっていたが、大きな違いもあった。

まず、面高さんの本では、スティーブが主人公であり、ロンとの関係が重視されていたのに対し、『アンビリバボー』では、スティーブとダニーの友情が中心に描かれていた。それは、現在もご存命でスティーブと一番親しかったダニー・ポーターのインタビューを番組に織り込み易くするための工夫だったと思われる。

また、ドラマとは切り離された形で、剛力彩芽、設楽統、日村勇紀といったタレントが番組のスタジオで戦争、友情などのテーマについてコメントしている。アンビリバボー（信じられない）として強調されたのは、ダニーがスティーブの死について知った直後に乗った飛行機が墜落し、奇しくも、彼がスティーブと一緒に訪れるはずだった日本にある米軍横田基地の病院で目覚めたこと、そしてツギエがアメリカで暮らしていた街が、偶然にもスティーブの住むコロンビアから車でたった4時間の距離にあったという運命の皮肉である。

おわりに

以上が2020年度の調査の全容である。私たちは、まず澤田美喜と彼女が設立した神奈川県大磯町の児童養護施設エリザベス・サンダース・ホーム、鳥取県岩美町にある鷗鳴荘の過去と現在について基礎知識を身につけた上で、ホーム出身者の卒業後の日本および海外における生活について調べることにした。

昨年度（2019年度）の学生は、エリザベス・サンダース・ホームと占領期に生まれていわゆる「混血児」について調査するために、神奈川県でフィールドワークを行った。残念ながら、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、私たちはそのような県外での調査に向かうことはできず、他人との接触を避けながら過ごす一年間となった。しかしそうした状況のなかでも、日本語と英語の文献調査、映像資料の分析、県内での現地調査、県外の関係者によるオンライン講義などを通して、鳥取県岩美町にまつわる話からブラジルやアメリカといった遠く隔てた海外の地域における状況について調べることができた。

今回の地域調査プロジェクトで私たちは、約75年前に存在した占領期（1945-1952年）という時代に起きた出来事と生きた人々を出発点に調査を進めた。しかし、これは単に過去の話として捉えてはならない。現在は、占

領期とは時間的に離れていると思われがちだが、その時代に生まれた多くの人は今もご存命であり、調査を通して明らかになった国家と人種、国籍、移動などを巡る複雑な状況は、現代を生きる私たちの問題でもある。そして澤田美喜はじめエリザベス・サンダース・ホームの出身者や関係者により築き上げられた人と人との繋がりや、今なおローカルとグローバルな広がりやのなかで生き続けている。

何よりも、岩美町で地元ガイドを務めながら鷗鳴荘と澤田家の墓所の維持管理をする油浅郁夫さん、大磯町で語り部として活動し、澤田美喜記念館でも勤務する武井久江さん、海外に渡ったホーム出身者の人生を取材し、書籍を執筆した面高直子さんのような方々の努力によって保存・伝承されている知識の重要性を強く感じる事ができた。微力ながら、本報告書も今後の保存と伝承の一助になることを期待する。

最後に、本調査を行うに当たってご協力をいただいた皆様にお礼を申し上げ、締めくくりとする。



【ご協力いただいた皆様】

上嶋勝巳、岡村知子、面高直子、武井久江、油浅郁夫（敬称略）

【参考文献】

- 面高直子『ヨシアキは戦争で生まれ戦争で死んだ』講談社、2007年
- 沢田美喜『黒い肌と白い心―サンダース・ホームへの道』ほるぷ、1980年（初版1963年）
- 「澤田美喜と占領期の子どもたち―エリザベス・サンダース・ホームと鷗鳴荘」『2019年度地域調査プロジェクト成果報告書』鳥取大学地域学部地域学科国際地域文化コース、2020年
- 下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」―ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社、2018年
- 鳥取県中南米移住史編集委員会編『鳥取県中南米移住史』鳥取県、2008年

鳥取県立公文書館編『澤田廉三と美喜の時代』鳥取県、2010

年

横浜都市発展記念館編『焼け跡に手を差しのべて一戦後復興
と救済の軌跡』公益財団法人横浜ふるさと歴史財団、

2016年

Associated Press, “Leon Panetta, Vietnam swap war effects.”

Politico, June 5, 2012.

Mariko Kato, “Occupation orphan traces roots.” *The Japan
Times*, June 6, 2009.

Mindy Lucas, “Letters from Vietnam soldier come home.” *The
State*, July 15, 2012.

【写真】

2020年8月1日 第1回岩美町調査



鳥取県岩美町の鷗鳴荘



鷗鳴荘での聞き取り



澤田家墓所前の石碑



澤田家の墓所

2020年10月25日 第2回岩美町調査



鷗鳴荘への道



鷗鳴荘2階の視察

2020年10月30日 武井久江さん オンライン講義



現在のエリザベス・サンダース・ホーム



エリザベス・サンダース・ホーム各施設の紹介

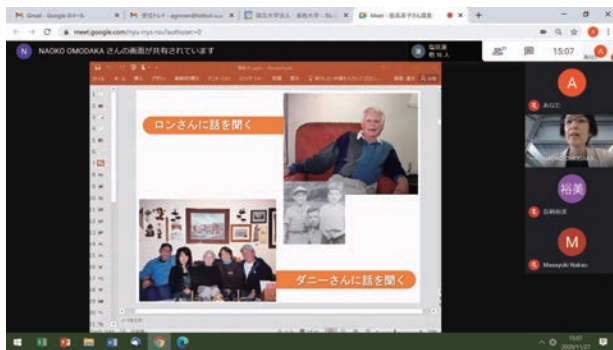


澤田美喜記念館の紹介

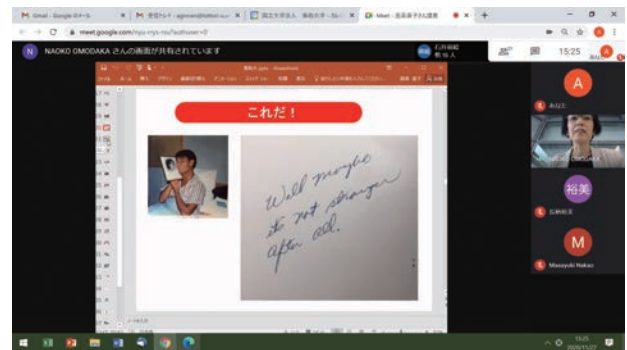


武井さんへの聞き取り

2020年11月27日 面高直子さん オンライン講義



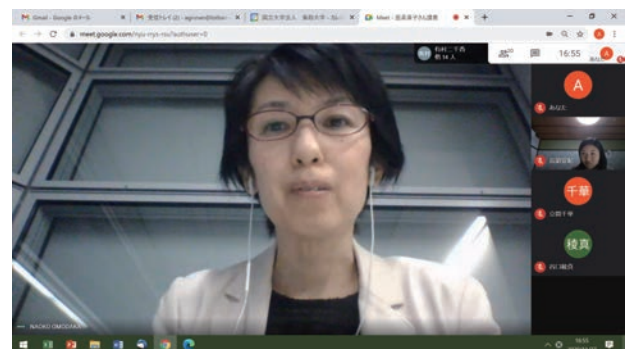
アメリカでの取材の様子



「僕はもう、よそ者じゃない」



日本テレビ『子供たちは七つの海を越えた』(1978年)



面高さんへの聞き取り

Miki Sawada and the Elizabeth Saunders Home: Tracing Local and Global Connections

Instructors

Alexander Ginnan
Masayuki Nakao
Hiromi Nagara

Students

Nichika Arimura	Mei Murayama
Yui Goto	Taki Nagahama
Ami Hamae	Akari Shimizu
Daiki Ishiga	Ren Shiomi
Moe Ishii	Yumika Suenaga
Saki Iwamoto	Ryoma Taniguchi
Umi Kang	Chika Tatsuma
Yuki Kasai	Mayuna Yamagishi

Overview

Second year students at the Faculty of Regional Sciences are required to take a course entitled *Regional Survey Project* in which they spend a year researching a topic in small groups under the guidance of a team of instructors. This year, sixteen students chose the topic *Miki Sawada and the Elizabeth Saunders Home: Tracing Local and Global Connections*. Following the initial project from the previous year, students researched about the life of Miki Sawada (1901–1980) and the foster home Elizabeth Saunders Home which she established for children born between foreign soldiers and Japanese women during the Allied occupation of Japan (1945–1952). Students also did research on lives of people after they left the foster home, both in Japan and overseas. Due to the spread of the COVID-19 virus, research activities were highly restricted this year. Students were not able to travel outside the prefecture and most classes had to be conducted online. At the same time, this situation allowed for close readings of texts and online communication with distant people. Despite many inconveniences, students managed to compile a thorough report.

Main Texts

Associated Press. “Leon Panetta, Vietnam swap war effects.” *Politico*, June 5, 2012.

Kato, Mariko. “Occupation orphan traces roots.” *The Japan Times*, June 6, 2009.

Lucas, Mindy. “Letters from Vietnam soldier come home.” *The State*, July 15, 2012.

Omodaka, Naoko. *Yoshiaki ha Sensō de Umare, Sensō de Shinda*. 2007.

Sawada, Miki. *Kuroi Hada to Shiroi Kokoro: Sandazu Hōmu he no Michi*. 1963/1980.

“Sawada Miki to Senryōki no Kodomotachi: Erizabesu Sandasu Hōmu to Ōmeiso.” 2019 *nendo Chiiki Chōsa Purojekuto Seika Hōkokusho*. 2020.

Tottori-kenritsu Kōbunshokan ed. *Sawada Renzō to Miki no Jidai*. 2010.

Tottori-ken Chūnanbei Ijūshi Hensan Inkai ed. *Tottori-ken Chūnanbei Ijūshi*. 2008.

Research Activities

In addition to reading the above texts and analyzing related videos, students carried out local site visits, conducted interviews, and participated in special online lectures. The main activities are as follows:

Aug. 1 st	Site Visit: Omeiso and the Sawada Family Grave Guide: Mr. Yuasa
Oct. 25 th	Site Visit: Omeiso and the Sawada Family Grave Guide: Mr. Yuasa
Oct. 30 th	Online Lecture: Ms. Takei (from Oiso) Topic: Miki Sawada and Elizabeth Saunders Home
Nov. 27 th	Online Lecture: Ms. Omodaka (from Tokyo) Topic: About Yoshiaki

Acknowledgements

The students and instructors would like to thank all the people who supported this project.